

東京バッハ合唱団 月報

[第730号] 2023年4月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.730

April 2023

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

定期演奏会（5月6日）へのお誘い

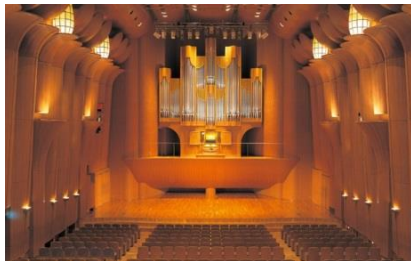
日本語でバッハ・カンタータを歌う、聴く

大村 健二（団員）

次回、第122回定期演奏会は、5月6日（土）の開催です。連休のイベントもおおた済んだころの、もともと心地良い季節でしょう。

会場は、JRで荒川をわたった川口駅正面の「川口総合文化センター・リア音楽ホール」。都心にお住いの方には「川口」と聞いて、まずは遠いと思われるかも知れませんが、東京駅から東北本線で約25分、新宿駅からも埼京線・赤羽駅乗り換えで約22分、下車して目の前ですから、歩く時間を入れれば、お馴染みの杉並公会堂よりもずっと近い場所にあります。

木の肌の優しい壁面に囲まれ、音響効果に優れたクラシック音楽専用のホール（左写真）。ぜひともお運びください。



コロナ禍を乗り越えて

ご存じのとおり、今年の7月に東京バッハ合唱団は創立60周年を迎えました。記念公演（第121回定期演奏会、2022年5月14日、杉並公会堂）には、コロナ禍の規制の影響や感染不安の残るなかにもかかわらず、300名ほどのお客様をお迎えすることができ、「最後まで感激して聴いていました」「心に愛と光明を覚える素晴らしい演奏だった」「演奏の奥ゆき、厚み、また60年の歴史に感動しました」……と、アンケートに多くの暖かい反響をいただきました。

上記公演にいたるまでの2年半ほどは、感染症との付き合い方に定見もなく、国内でも海外でも人びとは怯えていました。当合唱団でも、たび重なる非常事態宣言の発令などで、2つの定期演奏会（2020年12月の第119回、21年6月の第120回）をはじめ、地方公演の予定や教会コンサートの企画が、つぎつぎにキャンセルに追い込まれてしまいました。そんな中でも、これらの代替公演として、感染対策を講じながらの無観客オンライン上演や、観客が後援会員12名限定のコンサートなどを試みました。

また、練習回数を間引いたり、パートを限った縮小練習を行ったり、練習会場の使用が中止になったと

きにも、公共施設を渡り歩いたり、オンライン会議システムを駆使しての在宅練習……と、団員のみなさんは、不自由のなかでも工夫を凝らして練習活動を見つけました。

かくして、この初夏に向け、ようやく制限のない音楽会の準備が進み、バッハを思いっきり歌える喜びを噛みしめながら、目下、仕上げに精を出しているところです。今年の60周年記念公演の来場者を上回る多くの観客に包まれて、創立61年目の新しいステージに踏み出せますよう、皆さまの応援をこころより期待いたします。

歌詞のある音楽

さて、文明の相貌をも変質させるほどの事態が進んでいるように思われますが（新型コロナパンデミックとロシアのウクライナ侵攻など）、こんな背景の中で迎える創立61年目のコンサートです。芸術にどんな力があるのか、ここ数年、多くの表現者たちが問いを發してきました。われわれも、一度、問うてみる必要があります。



取りあげる曲目は、《昇天節オラトリオ》を中心とした3曲のバッハ作品です。（左図はチラシ挿画、ジョット「キリスト昇天」。公演概要は次ページ）これらは、何をわれわれに訴えるのでしょうか。

われわれの演奏しようとする曲、みなさんがお聴きになろうとする曲が、歌詞のある音楽であり、その歌詞がわれわれの母語である、ということ。これは重大な事柄です。音楽を聞きながら、同時に意味も理解できるからです。バッハが意図したのは、これ。

そうでない場合は、たとえば逆のケースで、《昇天節オラトリオ》の歌い出しを、<ho·me·yo ka·mi·no

月報 2023年4月号 CONTENTS

- ・おたより（佐藤章/西村清志/伊東浩史）……p.2
- ・見る・聴く / 野村万作の舞台に（大村恵美子）…p.3
- ・連載：退屈するのはいそがしい [26]（大野博人）p.4

mi・ku・ni〉とわれわれが歌っても、聴き手がドイツ人だったら、その通りの（あるいは、それらしい）音声が音楽の一部として聞こえていて、弦や管の響きに溶け込んだ、（うまくいけば）心地良い、弾んだ旋律を味わってくださるでしょうし、不幸な場合には、清澄な音楽を邪魔する雑音の混入に腹を立てるだけかもしれません。

どうすれば良いか？ その部分の歌詞を〈Lobet Gott in seinem Reichen〉（原詞）に置き換えて歌えば良い。そのうえで、意味と同じほど重要なのは、旋律やテンポ、リズム、和音、音声の色合い、これらが総合として表出する気分や情調です。いわば音楽そのもの。その音楽が意味を補い、意味が音楽に方向や深みを与えて、バッハの作曲意図が完結します。

分かり切った、当然のことを述べました。われわれは、バッハの音楽を、日本語で歌い、日本語で聞く機会をあたえられています。バッハの祖国の人びとと同様に（！）作曲者の「意図」を丸ごと味わえるのです。

お伝えしたいメッセージ

今回定演のステージから聴き取っていただきたいメッセージは、開幕のカンタータ《泣き 歎き 憂い 迷い》を結ぶコラール（第7曲）の歌詞に尽きます：

〈神のみわざこそ ことごと善けれ〉

混沌のなかに置かれたわれわれは、ある転回のきっかえを経て、突然、明るみへと解放される——。この第12番の転回点は、第4曲アルト・アリアの中間部、〈主のみ傷こそ 慰め〉という句であり、第5曲バス・アリアは、曲調も一転、明るい変ホ長調で〈主に従わ

ん〉と歌い出します。

この手法はバッハの常とう手段であり、つづくカンタータ第22番では、第3曲バス・レチタティーヴォ中に、最終曲の《オラトリオ》では、天への別れの悲しみ（第4曲の“名曲”アルト・アリア）を経て、第7曲レチタティーヴォ中のふたりの天使が告げる再臨の約束に、それぞれ「転回点」が置かれています。

ここでの〈神のみわざ〉を「宇宙の真理」と言い換えることによって、教会の外へのメッセージへと広げたいと望みます。

お・た・よ・り

ラジオ・インタビューを聞いて

佐藤 章（高知市）

CD（NHKラジオ第二放送、2022年10月23日の録音）拝聴させていただきました。

先生の少女時代からフランス留学、合唱団の創立、運営とご苦労を苦勞と思わせない、プラス思考、寛容な心が感じられるインタビューでした。心が軽く、明るくなった気がいたします。今後益々のご活躍と合唱団のご発展をお祈りいたします。

バッハ禅

西村 清志（後援会員、小樽市）

寝る前にバッハの無伴奏ものを聴くのが、すっかり習慣になってしまいました。ぼくにとっては一種の子守り唄ですが、ぼくの中では、それを“バッハ禅”と呼んでいます。

月報3月号を拝読して

伊東 浩史（塚原整形外科）

- ・加藤剛男さんのエジプト見聞記。ちょうど3月3日、ギザの大ピラミッドの中に未知の通路が発見されたという報道がありました。エジプトは遠い国。古代文明があっても現代とは関係のない国と思っていましたが、聖書ゆかりの地であり、イエス様の宿泊した宿があるんですね。鳥料理もミルクのぼん粥もお母様を思い出させる味なんですね。
- ・大村恵美子さんのレース様のピンクのマフラーはお優しい顔によく似合いますね。
- ・千葉光雄さんの紅梅のお写真きれいですね。
- ・大野博人さんの「変奏曲は変奏してこそ」。大野さんの優しさを感じます。かつて政治家が呼びかけていた年間20万人の日本への定住は既に現実化していたんですね。「一家をあげて南米へ」というポスターの貼られた大正時代とは、捉え方が随分変わってしまったのですね。世の中や社会は変わって当たり前なんですね。とても楽しく読ませていただきました。

— 第122回定期演奏会 —

〈日本語上演・大村恵美子訳詞〉

[日時] 2023年5月6日（土）14:00 開演

[会場] 川口リリア音楽ホール

*

カンタータ第12番《泣き 歎き 憂い 迷い》

カンタータ第22番《イエス 十二弟子呼びて言いたもう》

昇天節オラトリオ《頌めよ 神のみ国》BWV 11

*

光野孝子(S)、谷地畝晶子(A)、鳥海寮(T)、小藤洋平(B)

管弦楽:ARS(コレギウム・アルモニア・スペリオーレ・ジヤパン)

オルガン:田尻明葉、合唱:東京バッハ合唱団

指揮:大村恵美子

チケット発売中:全席自由 3500円(当日売り 4000円)

〈後援会員の皆さまへ〉

後援会員の皆さまには、先月(3月)号「月報」に同封して「招待状」をお送りしました。お手許に届いていない方は、事務局までお申し出ください(上欄参照)。

なお、ご友人等お誘い合わせいただける場合は、「入场チケット」をお送りいたします(3500円、振替用紙同封。ご招待者席とも全席自由席です)



■ハクモクレン（白木蓮）、撮影：千葉光雄（2023/3/14）

見る・聴く

大村 恵美子（主宰者）

「ねえ、見て」「ねえ、聴いて」と、子どもはよく言います。幼い子どもと一緒に過ごす時間が多かった若い頃のことです。今はもう家で伴侶と2人で暮らす時間が多く、小さな子どもたちとの接触は、残念ながら大変まれになりました。

自分自身の幼時を思い出してみても、常に外界にあるものの様子を見聞きすることが、珍しく、新鮮な経験でした。もう年を経たこの頃になると、あそこはこんな処、あれはこういう時にこんな音を出す、など、これまでの体験から、ほとんどあらかじめ想像できます。家にこもることが多く、すでに体験してきたことを思い出しては、懐かしんだり、よくまあ無事に切り抜けられたもの、と感謝したりします。

老いて、自他共に動く機会が極度に減ると、これまでの思い出が、かすかなもの、再び息詰まるほどに迫ってくるもの、様々な形をとって、現在の人生によみがえるものです。

それでも私は、歳をとるに従って、過去が思い出せず、お顔やその方のお名前が、ちゃんと浮かばなかったりして、不便なことがふえています。段々DVDなどが発達してくると、そんな時の助けとなることも多いのでしょう。

一方、そのように動くものが記憶から遠ざかるにつれて、見聞きするものを追うことよりも、自分自身の中で、人生のいろいろな状況について、その意味を考え、ただすことも多くなるのではないのでしょうか。

一日が終わって、今日は、あんなことがあった、こんなことがあったと思っただけに終わるのではなく、それぞれの出来ごとから、いろいろな角度の意味を考え合わせる。これが、年輩の人間のすることではないのか。体験をそのまま受け身に終わらせるのではなく、そこから意味を引き出して、今後の対処にあてるようにする。こうすることで、自分の更なる成長に資するのが、必要なのでしょう。

どれだけ長く生きて、人生は意味深く面白いものでありたいと思います。

邦楽の第一人者、^{（はべ）} 野村万作の舞台に侍って

大村 恵美子

本日（2023年3月23日）午後2時、有楽町朝日ホール「万作（人間国宝）狂言の世界」を鑑賞。

もう何十年ぶりかで、私の「東京バッハ合唱団」月報をお送りしつづけて来た、野村万作様の舞台を見聞きして、野村萬斎様の解説と狂言2曲（柑子・泣尼）を拝見することが出来ました。

私は、常々公言しているように、親兄弟、恩師や友人方に恵まれて育ち、そのことを感謝しています。最近の月報（1月号）にも載せたように、アメリカ占領軍の数多い善行政策のうち「バッハのカンタータをLPで」に心服して、その後の私の進路が決定づけられたのでした。

その後、深い接触を得た高校の先生、森井眞様（元の夫）から、キリスト教文化と共にわが国伝統文化にも開眼させられ、20歳の時結婚して、毎月会員となった芸能公演の定期的催しに連れて行かれました。万作様は、私の誕生と同じ1931年の生誕。その「万作の会」など、大活躍の野村万作様のステージをはじめ、東西にわたる人間のトップ演奏家の好演を、見続けて来ました。

今日の狂言は、「柑子（こうじ）」「泣尼（なきあま）」の2曲で、どちらも私には初めてでしたが、新聞で広告を見た瞬間に、3月には「この万作の狂言を見に行きたい」ときめて、現在の夫・大村健二に入場券を手配してもらい、やっと手にしたのですが、彼は目下、私の日本語訳歌詞を並列して入れるバッハ・カンタータ全曲の楽譜の出版許可をブライトコプフ社から得て、それにかかりきりで、超多忙の身。手に入れるまでの時日がかかって、そのせいで当日会場に入ってみたら、随分うしろの方の席で、楽しみにしていたのに、ステージの音がとても聴きとりにくいのです。

でもお客はみんな親しんでいる方々が多いらしく、もう気配を感じたら演者に先立って笑い始める。これには感心しました。そして、私自身の、疎遠になっていた生活を後悔しました。狂言に馴れ親しんでいる多くのお客方のおかげで、私は昔の雰囲気を取り戻すことが出来、そのために「よかったなあ」としみじみ喜びながら帰宅しました。

平和なわが国は、西洋文化と共にこんな日本の伝統的古典芸能に接する喜びまでも、提供してくれるのです。現在の日本の政治を、何も能率的に運んでくれないのでは、と危ぶんでいる私達でしたが、まだまだいいことも実行してくれているのだ（彼らの手柄ではありませんが）、とこれもまた感謝。

今日は、書けば長くなるばかりの、プラスづくめの好日でした。みんなみんな有難うございます。この辺で止めておきます。

アマチュア音楽家に求められる資質

安曇野閑人 大野 博人

「なかなかいいじゃない。よく弾けてるよ」

大学に入ってチェロを習い始めたときのことだ。レッスンで初心者向けの練習曲を弾くと先生がほめてくれた。悦に入る私に、先生はこう付け加えた。

「あとは、リズムと音程だけだな」

「？」

大人になって楽器を手にしたアマチュアを教えるのは大変だと思う。すでにいろんな演奏家の録音もたくさん聴いていて、だれがいいとか悪いとか、いっぱい評論家きどり。だが、本人が奏するのは音楽かどうかもあやしいレベル……。

アマチュア音楽家には、「自覚と謙虚さ」が足りないことがしばしば。きびしくするとやめてしまう。ほめそやすとつけあがる。ひどい生徒も、ほめるような言い方で指導もしないといけない。私もそんな一人だったのだろう。先生も気を遣っていたのだ。

そもそもチェロを始めたいきさつからしていいかげん。50年前、大学受験で上京したとき、その学生だった高校の先輩の下宿に泊めてもらったら、彼の大学の友人が遊びに来た。

「君、クラシック音楽好きか？」

「ええ。聴くのは好きですが……」

音楽は小、中学校の授業で接しただけ。高校では、芸術科目として美術を選んだ。音楽の授業は受けていない。音符もぜんぜん読めなかった。

「じゃあ、入試に合格したらオケに入れ」

「でも楽器をやったことはないですよ。だいたい井とbも区別できないし」

「問題ない。じゃあ決まり。合格したらオケに来い。で、楽器はチェロ。いいな？」

この人は大学オケでチェロを弾いていた。学生数の少ない学校なので、部員はいつも不足気味。そのころ

はとくにチェロパートが少なかったのだ。私は断ったら大学受験にも失敗しそうな気がして、つい答えてしまった。

「わかりました。オケに行きます」

さいわい合格したのでなりゆきでオケに入部。備品である古ぼけたチェロを渡された。ニスもはげ、ところどころささくれ立っていて「ミカン箱」と呼ばれていた。

弓でさびた弦をこすったらブーという無愛想な音。でも、私は「おお、ちゃんとチェロを鳴らせた」とその気になってしまった。

「自覚と謙虚さ」のないアマチュア奏者がひとり生まれた瞬間である。学生時代は授業もそっこのけで部室に入り浸る日々となった。バイトでお金を貯めて楽器も買った。

ただ新聞記者になってからは、楽器はいつもそばにあったけれど弾く時間はほとんどないまま。何ヶ月もケースから出さないこともしょっちゅう。それが約40年続いた。退職してようやく、日々、楽器に触れるようになった。この調子ならすぐに上達するだろうと考えた。40年経っても「自覚と謙虚さ」は足りないまま。

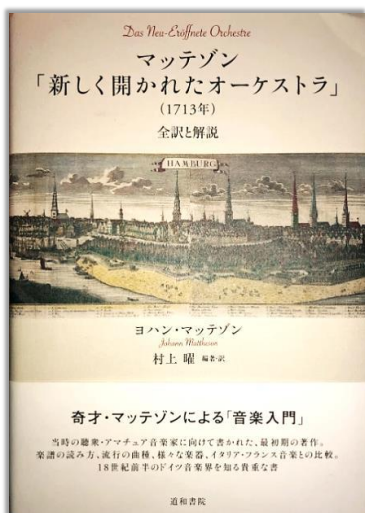
となりの松本市にレッスンにも通い始めた。先生になった村上曜さんはちょっと変わりダネ。英国の大学で航空宇宙工学の博士号を取った物理学者。英国ではチェロの勉強もして、プロ奏者としての資格も取得。帰国してからは、どうやら物理より音楽にのめり込んでいるようで、今はチェロで演奏者や教師としての活動をしなが、最近バハとほぼ同時代のドイツの音楽家、著作家のヨハン・マッテゾンの『新しく開かれたオーケストラ』というめずらしい音楽書の翻訳まで出した。

そんな先生だから、教え方も理詰めで明快。私の弾き方のどこがまずいのか理論的に説明する。弦をうまく鳴らすための弓の角度などもホワイトボードで緻密に図解しながら教えてくれる。かなりわかりやすい。

「楽器を楽しむために、90歳になっても弾けるような奏法を身に付けましょう」と先生。なんだか腕前が上がりそうな気になる。練習曲の指導でも「これは超絶技巧曲にも欠かせない技術です」などというものだから、私は90歳になるころには超絶技巧曲が弾けるようになっているだろうと信じて、つつい練習する気になる。先生はおだて方もうまい。

アマチュア音楽家には、才能がないうえに練習をしなくともなれる。私みたいに。ただ、それを長く続けるのに必要なのは「自覚と謙虚さ」の欠如という資質ではないか。私はその資質にとっても恵まれている。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



■村上曜さんが訳したヨハン・マッテゾン著『新しく開かれたオーケストラ』。バハの時代の音楽界のことがよくわかる。

(写真提供と説明：筆者)

[編集後記]

マッテゾンと言えば、バハが苦手としていた人物という記憶がありますが、ここでお会いしたからには、読まずに済ますわけには行きません。取り寄せました(K)。